

成導寺の雲、雨、水、月：文苑

著者	夢園
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 4
ページ	2 8 - 3 0
発行年	1899-10-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/5371

折から颯々と肌を切るやうな沙風が、一陣二陣續けさまに吹いて來たので、余は覺えず身を震はして立ち上がった。そして余の妄想は、同時に拂と消えて仕舞つた。耳を傾けて聴くと、崖下に打ち寄する浪の音は、以前よりも遙かに高かつた。

忽ちまた家の病人の事が胸に浮んで來た。あゝ覺えず永居をした。家ではさを氣使つて居ることだらふと、腰の時計を覗いて視ると、余は實に此誰も居ぬ、寒い、淋しい海角の岩の上に、一時間餘りを腰かけて居たのである。

月は既に高く昇つて居る。しかま影は殆ど雲の隠す處となつて居れば、海洋の色も、前き程には白く美ましく見えなかつた。振り返つて見ると、濱脇灣の彼方に、燈火の數多水に映つて、白く光つて居る所がある。別府港はかまこであつたか。

文苑

成導寺の雲、雨、水、月

夢園

廣卷を抱いて成導寺に入り滞ること五日晝はさまざまの人の來りて靜寂を破り
まも夜は只天籟のおとなふもあはれ

玉と散り霧とくたけてなかれゆく水に心をすませはやさまき人の月の前のしら
へにも似通ひそゝろ心もうき立ちぬ膝を抱きて苦吟すれども詩遂に成らず只舊

作を歌ふて懷をやる

雲となりまた雨となるさだめなき世にすみはひて
さびしき里をどめ來れは縁えたゝる夏山の
岩もる清水音にむせび松ふく風のしらへさへ
むかしなからの友にしてなくさめ顔にひゝきつゝ
よへはことふる山彦もつれなき人にまさりけり
たきりて落つる瀧の水泡風^{みづわ}にやふるゝ芭蕉葉の
いつれはかなき世なりとも頼すくなき世なりとも
木々の空蟬聲立てゝなきわふるさへあだなれや
空とぶ雲の西、東はなれあふにもまかせてん
池にうかへる赤鯉の遊ぶこゝろをこゝろにて

時は陰曆五月、ひる間は五月雨のふりみふらずみ、あるときは苔ふりし軒端に瀧を
まきり、間なく西の空あかうはれ來りて黒う生ひ茂る椎柴の葉も一入の色を添ふ
るなど、雨の變化もなかつくしつ、雲の徂徠もなかつくまづるか、よるになりて
はまた竹の葉越しにふさくる風に、もしひきぬんとま、さきの程より小やみとな
りし雨雲のあまたゝならすおそろしきもさすが東の空あかうなりまは月や出つ
らん雲の絶間に二ツ三ツ見ゆるもなつかしき星の影は天の秘密をや洩らすらん
坐して雲のやふるゝを待つ山寂として聲なく月に不平を訴ふる鳥なく思に胸を

なやましむる人なく只漕々として落ちたぎつ漕の音絶えずきこゆる水車の音と
 相和して夜のさひしさをやふれと愈心すむたよりとなりてかまがましとも覺え
 ず二更の頃を過ぎしとき一本松の梢一まきりふきゆく風に雲や吹き散らされけ
 んまたれま月影えも云はすてり出てぬあまりのうれまさに水の面にをり立ちて
 月もろとも掬びあぐれば金波銀波ちり碎けては底にすむろくづの靜なる夢や
 さめつらんわれ天下を掌にする雄圖なま獨り月光を弄ふと莞爾として顧みれば
 わが風にやふるゝと歌ひま汀邊の芭蕉の若葉の露もまだひはてぬに月の光りわ
 たるもはかなくなかめられぬ長石の下科頭に箕踞し白眼もて人生を笑ひ如泡夢
 幻を觀じて念珠つまぐるまで世棄てはてしにはあらねと獨り山寺の月に心をす
 まさんはちりの巷のちりに埋もれぬる身にはまたなくゆかまくすいしきとにこ
 そ覺えしか

含暉樓賦呈古梅先生先生曾選

吳澹川詩載在廿四家選本因用題

其秋江收釣圖韵

講師 落合東郭

海。西。八。月。劈。緘。筆。勢。直。捲。廣。陵。濤。墨。華。四。散。香。迷。座。珍。重。何。嘗。一。字。蕭。夕。陽。長。橋。闌。影。赤。
 含。暉。樓。上。邀。佳。客。夫。妻。追。隨。抵。梁。鴻。對。酒。寧。說。鬢。髮。白。鬢。々。楊。柳。送。畫。船。前。川。映。出。裙。色。鮮。